



## 日本史③ (邪馬台国と金印)

12月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年12月21日(木)

古代史の初期、BC3世紀(始皇帝の徐福伝説)からAD5世紀(倭の五王の時代)に、日本には文字や記録がないことには困ってしまう。その頃のことは、魏志倭人伝や好太王の碑など中国や朝鮮の記録等に頼るしかない。

今、2世紀から3世紀、邪馬台国の女王卑弥呼の時代を読んでいる。

「何故、邪馬台国の女王卑弥呼が、魏の明帝から親魏倭王に任ぜられ、紫綬金印を授かったのか？」どのような事情があったのかと疑問を持った。

「親魏の王号」は最も格が高く、他に大月氏国があるだけであった。

当時の国際情勢とも言うべき、三国時代の中国、10国余りの朝鮮半島の国々、そしてそれに含まれる日本(邪馬台国)の状況はかなり複雑なものがあつた。

中国は有名な赤壁の戦い(208年)の後である。最大国であつた魏の曹操は、蜀と呉の連合軍に破れ、魏の国内を纏めようとしていた。朝鮮半島は鉄の開發により活発化しつつあり、各国の情勢は、魏の影響力(支配)の下にはあつたが、呉の干渉もあり、統一はされていなかった。

当時、邪馬台国の卑弥呼は30歳ぐらいの若さ。それまでに銅器はあり、半島の鉄器も利用されつつあり、邪馬台国は朝鮮半島の南へ進出し、30国余りの倭の連合国の女王へと行って行く時期であつた。

その頃、半島の北部遼東の豪族、「公孫氏」が、高句麗、烏丸を打ち、魏(明帝)に服さず呉の孫権と結び、魏を挟撃しようとしていた。また、公孫氏は韓や倭の諸国を服従させ邪馬台国も服属していた。当時の中国の人口は500万人、邪馬台国連合は25万人。倭はジャワと並び極東の二大人口国であつた。

このような情勢下、邪馬台国も含めた半島の諸国に、魏は協力して公孫氏を討つことを命じた。この魏の明帝の命に女王卑弥呼は積極的に応じ、238年6月魏の総攻撃により公孫氏は亡びた。

女王卑弥呼は、その年貢物を魏の都、洛陽へと献じ、明帝に忠誠を誓った。明帝はその行為にいたく感激し、239年にはその返礼とし、女王卑弥呼に「親魏倭王」の称号と「紫綬金印」を与えて、遠方の大国として遇した。

邪馬台国の所在は、現在も論争の中にあるが、私は邪馬台国は福岡県の博多湾岸にあつたのではないかと考えている。それは半島から最も近く、弥生時代の鉄器の発出土が最も多いという理由である。また、邪馬台国への途が数ヶ国を経るとするのは国を大きく見せるため、琉球国首里の王朝が中国の使節に西側首里だけを見せ、太平洋が見える東側を見せなかったのと同じ類である。

当時の国際情勢を睨んだ女王卑弥呼の果敢と快挙であつたと思う。卑弥呼は1000人の侍女を従えた希代の祈禱師であり、流石に先見の明があつた。